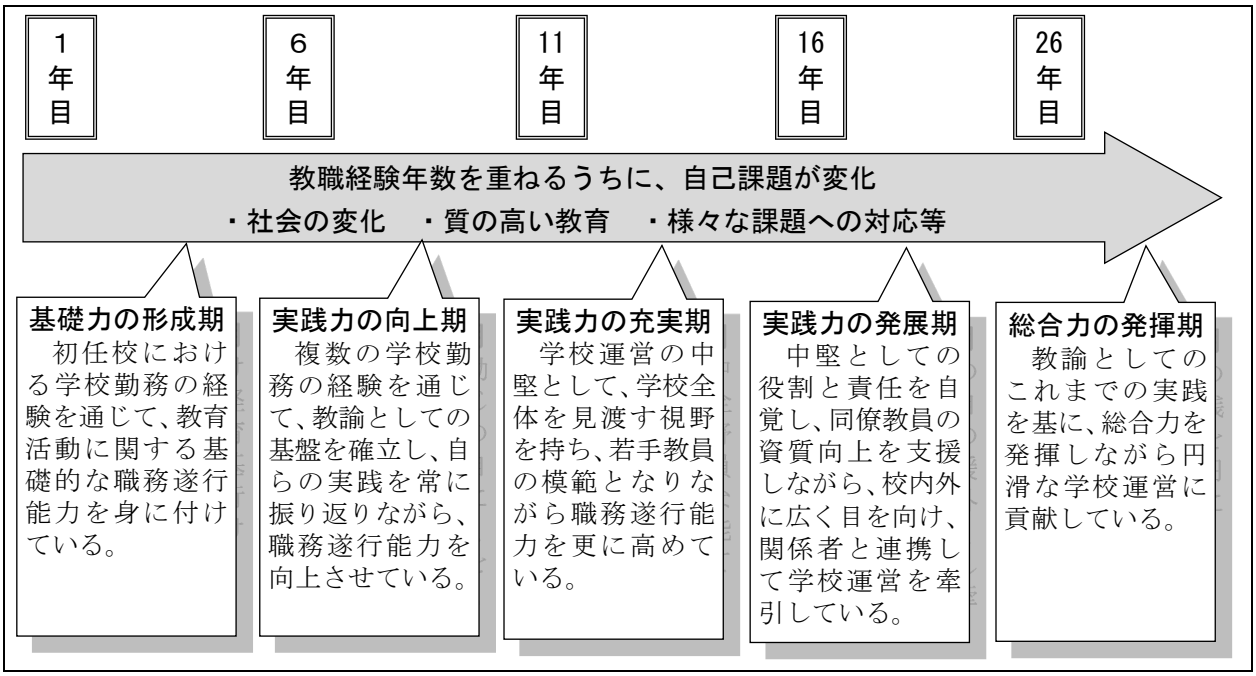
7　自己研修の進め方

1　自己研修の考え方

「『令和の日本型学校教育』を担う教師の在り方」の中に、「新たな教師の学びの姿」として、改めて「学び続ける存在」であることが示されました。

本県の初任者・２年目・３年目研修においては、アクション・リサーチという手法で、資質向上を目指していきます。

【図１】のように、教職年数を重ねるうちに、目指す姿は変化していきます。その時々の状況に応じて職務を遂行できるように、私たちは、教職生活全体を通じて「学び続ける存在」であることが不可欠です。



【図１】本県育成指標における教職年数と目指す教員像の関係

2　自己研修の進め方

自己研修は、次のように進めていきます。さらに、蓄積したポートフォリオを評価することも並行して行うことで自己研修の振り返りに役立ちます。

(1)　自己研修のテーマ設定

教員は、学級指導、教科指導、生徒指導等、日々様々な指導を行っています。それらの指導上の問題点からテーマを設定し、指導実践を積み重ね、試行錯誤しながらよりよい指導の在り方を明らかにするために、諦めずに洞察を深めていくことが、自己研修を進める上で極めて大切なことです。

(2)　テーマの明確化

自己研修のテーマを設定した時、物事の本質を見抜かなくてはいけません。自分が設定したテーマにはどのような原因や要因があるのでしょうか。教員としての指導力、児童生徒の家庭環境、周りの児童生徒との関わり方など、テーマに関わる根幹を見つめ直すことをねらいとしています。

(3)　情報収集と予備調査

学習指導には、参考となるいろいろな文献や研究に関する書物などが発行されています。文献や書物などを紐解き、児童生徒の実態に合った情報収集が必要になります。また、学習内容に関わる事前テストも予備調査として有効です。

(4)　方法や手立ての立案

「方法や手立ての立案」では、実際にどのようにテーマを解決していくかが鍵になります。実際の指導のためにどのような手立てをとるのか、指導の順序も含めて考えましょう。

(5)　育成を目指す児童生徒の姿の設定

自分が立てた「方法や手立て」を実践するにあたって、児童生徒が具体的にどのような姿になれば課題が解決されたことになるのかという目標の設定が不可欠です。児童生徒の具体的な変容した姿等を追求しながら解決の手立てを実践していくことが大切だからです。

学習指導では、「〇〇ができるようになった。」という行動目標や「事後テストで〇〇点とれるようになる」という数値目標が想定されます。

学級経営や生徒指導では、数値目標の設定が難しい場合がありますが、事前アンケートを実施するなどして、できるだけ数値目標を設定し、事後アンケートにより変容を分析することも有効です。

教員側の一方的な実践で終わることがないように、児童生徒の変容した姿を思い浮かべて目標を設定することが重要です。

(6)　計画立案

自己研修は、「自己研修のテーマ設定」の内容や「方法や手立て」の違いにより期間に長短の差が出ます。たとえば、学習指導についてのテーマを設定した場合、１単位時間で完結する場合があります。また、単元全体を見通して自己研修のテーマを設定した場合、10 時間以上の実施期間が必要な場合もあります。

さらに、学級経営や生徒指導についてテーマを設定した場合、指導を複数回繰り返し行ったり、たくさんの「方法や手立て」を講じたりする場合があります。その場合、長期的な計画立案が必要になります。

「計画立案」する場合、自分自身無理のない「方法や手立ての立案」を心がけ、さらに児童生徒への負担も考慮します。

(7)　実践

指導において、自分の「方法や手立て」の妥当性を見極めることや、立てた計画をやり遂げるようにすることはとても大切なことです。できれば、実施する際に、他の先生方に見てもらい、客観的な意見や受けた指導を、次の「結果の分析及び考察」、「振り返りと実践交流」に役立てましょう。必要に応じて、録画、録音、写真等で記録しておき分析に生かしましょう。

(8)　結果の考察

実施後、「育成を目指す児童生徒の姿」へどれだけ近づくことができたでしょうか。十分な成果が得られたという場合もあるでしょうが、十分ではなかったという場合も考えられます。

自己研修では、「方法や手立ての立案」に立ち返り、繰り返し行うこともできます。

(9)　振り返りと実践交流

「自己研修のテーマ設定」から「結果の分析及び考察」までの自己研修の一連の流れを振り返り、効果があったことを簡潔にまとめます。まとめた内容は、同学年の先生方や校内研修の場、基本研修での研修者同士の交流で伝え合いましょう。

「テーマ設定の仕方」、「手立てと検証方法の妥当性」等を視点として、「自分自身に身に付いた力」を自覚できるようになることが大切です。

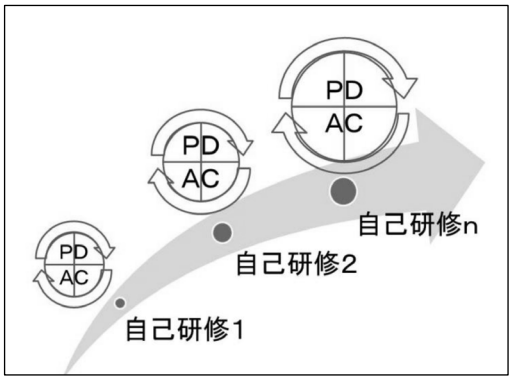
(10) 改善

【表１】に示したように、自己研修の進め方を継続的に改善していく PDCA サイクルは段階を経ながら解決し、振り返りや交流をすることにより、新たな課題や問題点を見いだすことができます。

そこで見いだしたテーマを用いて、さらに自己研修を繰り返し行い、見識を深めることも考えられます。また、【図２】のように自己研修を繰り返し行っていくことが、「学び続ける教員像」の確立へつながっていきます。

P（Plan）	自己研修のテーマ設定 テーマの明確化 情報収集と予備調査 方法や手立ての立案 育成を目指す児童生徒の姿の設定 計画立案
D（Do）	実践
C（Check）	結果の考察 振り返りと実践交流
A（Action）	改善

【表１】PDCA サイクルと自己研修の段階



【図２】自己研修の全体像

３　自己研修を進めるために配慮する事項

(1)　自己研修の目的を確認する

自己研修を始める前、または研修中において、「なぜ、何のために」この研修をしているのか確認することが大切です。自己研修は自己の資質を向上させ、さらには児童生徒の学習環境を改善していくものです。

自己研修の各段階で目的意識をもち、自ら進んで研修を行いましょう。

(2)　自分自身のニーズを大切にする

自己研修を進めるに当たっては、現在の課題、学びたい内容、児童生徒に身に付けさせたい力など、自分自身のニーズが出発点になります。児童生徒の様子や自分自身を見つめ直し、今自分に必要なことは何かを明確にして、テーマを設定し自己研修を進めていく必要があります。

自分自身のニーズを出発点に研修を進めていくことは、主体的な研修につながります。単なる思いつきでテーマを設定するのではなく、学習環境を見つめ直したり、情報収集して見識を深めたりしながら、今取り組むべきテーマを明らかにする必要があります。

(3)　児童生徒と共に成長していく視点を大切にする

自己研修では、テーマを設定し解決の手立てを実行しながら、実践を積み重ねていくことで、教員の自己成長につながります。児童生徒は研究の対象者ではなく、共同研究者と考えてください。先生方の指導（自己研修）が学習環境を改善し、児童生徒のために生かされていきます。PDCA サイクルを有効に生かし、教員と児童生徒が共に成長していくという視点を大切にしながら自己研修を進めましょう。

(4)　周囲の先生方や上司との対話を大切にする

自己研修を進めるうえで、うまく進んでいる時も、うまくいかない時、思うように進まない時にも、一人で判断したり抱え込んだりせず、周囲の先生方に相談してみることが大切です。同じような経験をしたことがある先生から、的確なアドバイスをいただける場合があります。

計画を実施する場合、周囲の先生方に参観してもらいましょう。参観したことを基に、対話をし、自己研修の妥当性や「手立て」に対する考えを深め、情報を共有することで互いの専門性の向上につながっていきます。

(5)　客観的に振り返る機会を設定する

振り返りでまとめた記録を活用しながら、自己研修全体を振り返る機会を設定していくことは重要です。時には、他の先生方からも意見をもらい、客観的に評価することも必要です。自分自身の取組を振り返り、決して独り善がりの指導にならないよう、謙虚に周囲の声に耳を傾け、自己の指導を見つめ直し、児童生徒の学習環境の改善に努めていかなければなりません。

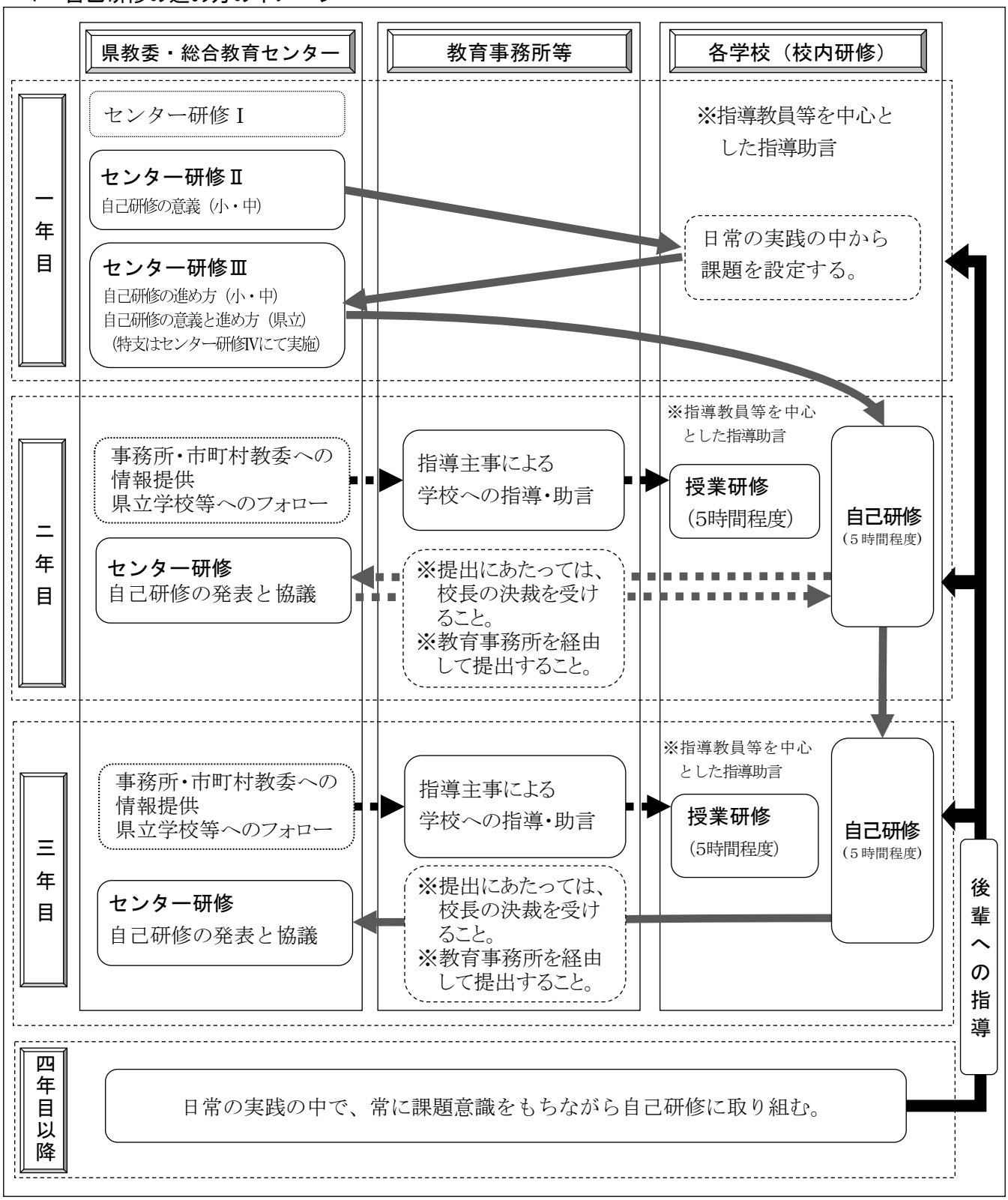
◆　自己研修の資料は岩手県立総合教育センターのホームページからダウンロードできます。

・　教員のための自己研修の進め方（PDF）

・　初任者・２年目・３年目研修における自己研修の進め方（PDF）

http://www1.iwate-ed.jp/03kensyu/index.html

◆　総合教育センターで行われる２年目及び３年目研修では、自己研修の発表と協議を行います。研修対象の方は、これに向けて年度初めから「自分にとって必要であり、自分サイズの無理のないテーマ」を設定して、ポートフォリオを蓄積させる等、主体的で計画的な取り組みになるよう自己研修を進めます。

まずは短期間での PDCA サイクルや段階を戻して取り組むことに心がけ、PDCA サイクルを繰り返し行い継続していくことで、「学び続ける教員像」を目指します。

４　自己研修の進め方のイメージ